

令和八年度
浜 松 学 院 大 学
地域共創学部

一般入試B日程 問題

「国 語」

注 意 事 項

1. 問題用紙は試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題用紙および解答用紙に、受験番号および氏名を必ず記入してください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 試験時間は60分です。
5. 印刷に不鮮明な所がある場合は、挙手して知らせてください。
6. 試験終了後、問題用紙および解答用紙を回収します。
回収が終わるまで、席を立たないでください。

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

一次の文章は、小川糸の小説『とわの庭』の一部である。本文は、盲目の女の子「とわ」が、母親と二人で暮らしている様子を描いている一節である。これを読んで後の問に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

目が見えなくても、母さんがどこにいるかは、すぐにわかった。母さんには、母さんだけの匂い^{にお}があつたから。その匂いが、とわの庭に生えている植物の香りに似ていると気づいたのは、ずいぶん後になってからだけど。わたしは、母さんの匂いならすぐにかぎ分けることができる。

オットさんにも、ほんのわずかだけれど匂いがあつた。母さんが、オットさんが届けてくれた箱のふたを開けると、いつも、今までそこになかった匂いをする。

それは、葉っぱのような奥深い香りで、うんと鼻に集中しないとわからない。大人になって、ホワイトセージという葉っぱをいぶした匂いをかいだ瞬間、^aノウリにオットさんのことが思い出された。^A、子どものわたしはホワイトセージなんて植物を知る由^{よし}もなかった。

いや、知る由はあつたのかもしれない。母さんが、わたしにたくさんの本を読み聞かせて、世界を広げてくれたから。^A、ホワイトセージを意識したことはなかった。だから、オットさんの匂いを正確に言葉で表現するのは難しかった。

それは、決してほの暗いイメージの匂いではなく、どちらかというといひなたに近いような匂いだった。わたしにとっては、匂いにもそれ特有の色のような光のようなものがあり、わたしは匂いと色を結びつけてイメージすることが多い。

オットさんは、週に一度、わたしと母さんが暮らす家に生活^bヒツジュ品を届けてくれた。

確かめたことなど一度もないけれど、オットさんは、おそらく男の人だった。母さんは、オットさん宛^{あて}の買い物^{あて}のリストを空き缶に入れておき、それを見たオットさんは次の週の水曜日に届けてくれる。

〈水曜日のオットさん〉

わたしは彼を、心の中でそう呼んでいた。

オットさんが誰なのか、母さんは教えてくれない。オットさんと母さんが言葉を交わすことはなかったし、オットさんが家に上がることもない。もしかすると、わたしの目が見えないように、オットさんも体のどこかに機能しない部分があつたのかもしれない。

オットさんは、水曜日のだいたい夕方頃にやってきて、家の勝手口に荷物を置くと、勝手

口のドアを、コン、コン、コン、と三回鳴らす。それが、オットさんが来た合図で、その音を聞いてしばらくしてから、母さんは外に置かれていた荷物を家の中に取り込んだ。食材もトイレットペーパーも絆創膏ばんそうこうも風邪薬も、石けんも歯ブラシも、すべてオットさんが届けてくれた。

母さんが家の中に荷物を取り込むと、たいてい電話が鳴った。呼び出し音が続くと、やがて自動で留守番電話のメッセージに切り替わり、そこに、キミヨウ^cな音が吹き込まれる。わたしには、うまく聞き取れない。それはまるで、冬の始まりの頃に吹く、冷たい北風のような音だった。

ただ、母さんにはその言葉が聞き取れるらしく、その音がすると、オットさんね、と毎回つぶやいた。

電話は、オットさんからかかってくる以外は鳴らなかった。わたしはずっと、電話というのは本来そういうもので、ある特定の人物と一対一でしかつながらないものだと思っていた。

わたしには、時間の流れという感覚があまりよく理解できないのだが、強いていえば^B、オットさんは時計のCだった。オットさんが来ることで、わたしはその日が水曜日であると理解し、一週間という時間の流れを感じることができた。

【ア】

オットさんが

D

なら、

E

はクロウタドリだった。

そう、黒歌鳥合唱団！

黒歌鳥合唱団のコーラスが、わたしに、朝を知らせてくれるのだ。

【イ】

目の見えないわたしにとって、光のカゲン^dで朝が来たり夜になったりすることを知るのは難しい。A クロウタドリが、わたしの目の代わりに朝の気配を感じて歌ってくれる。

クロウタドリが、わたしの時計。わたしは、クロウタドリの歌を聞くことで、朝の到来を知ることができる。

とわの庭は、黒歌鳥合唱団にとって絶好のステージだった。クロウタドリたちは競い合うように、とわの庭で美しい歌声をヒロウ^eした。機嫌がいいと、クロウタドリは夕暮れ時にもやってきて歌をうたうので、わたしは朝だけでなく、夜の訪れも知ることができる。

問題は曇りや雨の日で、そういう日は黒歌鳥合唱団の活動もお休みになるらしく、その美しい歌声を聞くことができない。クロウタドリは、わたしに朝夕の訪れだけでなく、その日の空の様子も教えてくれる、頼りがいのある存在だった。

【ウ】

朝からピアノが流れる日、母さんはいつも以上に機嫌がよかった。

【エ】

わたしに言葉を教えてくれたのも、母さんだ。

【オ】

母さんはある日、わたしに筆箱を買ってくれた。中を開けると、そこには消しゴムと、先

の尖^{とが}った鉛筆が数本入っていた。

「今日から、お勉強をしましょう」

母さんは張り切って言ったが、わたしはそれをどこか上の空で聞いていた。消しゴムから、オレンジみたいなレモンみたいな、おいしそうな香りがしたからだ。わたしは消しゴムを鼻に近づけて、匂いをかいでばかりいた。

とりわけ、わたしを夢中にさせたのは言葉のお勉強だった。

ある日、母さんはわたしの手のひらの真ん中に、綿のかたまりをのせて言った。

「とわ、これをゆっくりと、優しく握ってみて」

わたしは言われた通りに、少しずつ指先に力を入れて、そのかたまりを手のひらで包みこんだ。

「ふわふわ。ね？ とわ、わかる？ これが、ふわふわ」

母さんは、言った。

「ふわ、ふわ」

わたしは確かめるようにゆっくりと、母さんの言葉を繰り返した。

「そう、ふわふわ。だって、ふわふわ、しているでしょう」

そう言われると、確かに手のひらの中にあるものは、ふわふわしている。それ以外の言葉は似合わない気がした。

気がつけば、「ふわふわ」は身の回りのいろんなところにあった。たとえば、母さんのふくらはぎ。たとえば、トーストする前の食パン。例えば、わたしの唇。

「**F**」も、すぐに理解できた。

「**F**」は、常にわたしの内側にある期待の気持ちだった。母さんがそばに來ると **F** したし、夜、眠りにつく前、本を読んでもらうのも

F した。大好きなオムライスを食べるときも、 **F** した。

「ぬめぬめ」も、簡単だった。母さんが、わたしの手にナメコという名前のキノコをのせて、触らせてくれたから。母さんは「ぬめぬめ」や「ぬるぬる」があまり得意ではないらしく、^{じづら}字面までぬめぬめしていると ^{いまいま}忌々しげに言っていたけれど、わたしは、「ぬめぬめ」も「ぬるぬる」も結構好きだった。

「すべすべ」もすぐにわかった。母さんが、自分の太ももの内側にわたしの手を導いて、そこを撫^なでさせてくれたからだ。

「すべすべ」

わたしが言うのと、母さんも同じように繰り返した。

わたしは、自分の頬つぺたを母さんの太もものに当てて、すべすべ同士を隣り合わせた。

「すべすべ」は、とても気持ちのよい言葉だった。

逆に **H** 難しかったのは、「きらきら」や「ぴかぴか」、「もくもく」で、すぐには理解できなかった。

わたしはいまだに、「てくてく」がよくわからないし、自分の思っている「てくてく」が、果たしてその他大勢の人たちが使っている「てくてく」と同じ姿形をしているか、よくわからない。だからわたしは、「てくてく」を使う時、^Iおなかに穴があいたような**覚束ない**^{おぼつか}気持ちになる。

それから、色についての表現を理解するのも難しかった。

赤と言われても、赤とオレンジがどう違うのかわからない。青も、黄色も、紫も、わたしにははじめ、宇宙人の言葉を聞くみたいで途方に暮れた。^A、母さんがていねいに教えてくれたから、なんとなくわかるようになった。

わたしは、理由はよくわからないけれど、「にびいろ」という言葉が好きだ。鈍色だけは、最初からわかるような気がした。にびいろという言葉を最初に教えてくれたのも、母さんだった。母さんは、昔の人の喪服の色だと教えてくれたのだ。喪服って？ とわたしが更に質問すると、母さんはしばらく間を置いてから、愛する人や親しい人が遠くへ行って、もう二度と会えない悲しみに包まれた時に着る服よ、と言ったっけ。

それなら、わたしはまだ知らないはずだった。だって、愛する母さんはいつもわたしのそばに**いる**もの。^Aわたしは、「にびいろ」という言葉に出会う前から、鈍色を知っていたような気がする。^J鈍色とわたしは、もしかすると前世で親友だったのかもしれない。

読書家の母さんが、わたしにもよく本を読んできかせてくれたから、わたしは家にいながらにたくさん旅をすることができた。クロウタドリという名の、体の左右に翼の生えた空を飛ぶ生き物がいることを教えてくれたのも、外国で書かれた物語だった。

旅に出るのはたいてい寝る前の時間だったけど、たまに、陽だまりの中で旅をすることもあった。日本が舞台のおはなしも、外国が舞台のおはなしも、架空の国が舞台のおはなしも、いろいろあった。今のおはなしも、大昔のおはなしも、未来の宇宙人が出てくるおはなしもあった。

本もまた、オットさんの手によって、毎週水曜日に届けられた。

それまで、わたしは文字通り、片時も離れることなく母さんといっしょだった。雪の中に作った巣穴でひと冬を過ごす母熊^{くま}と小熊のように、わたしと母さんは小さな家から長く外に出かけることなく、ふたりだけで暮らしていた。わたしは、それが当たり前なのだと思っていた。家の中に母さんさえいてくれたら、わたしはそれで満足だった。

問一

二重傍線部 a～e に相当する漢字を含むものを次の各群の ①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号を答えなさい。

a ノウリ

- ① 人とのキヨリ感をうまく調整するのはとても難しい。
- ② 会社では原材料のカンリに細心の注意を払っている。
- ③ 業績と社員の士気はヒヨウリ一体である。
- ④ 本部隊と当該組織とは微妙なリガイ関係にある。
- ⑤ とうとうインフルエンザにリカンした。

b ヒツジュ

- ① 価格はジュヨウと供給との関係で決まる。
- ② プラスチックは合成ジュシとも呼ばれている。
- ③ 幼いころからこれまでの人生のジュバクを解く。
- ④ 親戚一同が集まって祖父のソツジュを祝う。
- ⑤ 区役所で婚姻届けがジュリされた。

c キミヨウ

- ① 今年度は会社のナイキを改正した。
- ② 新しい事業分野はタキにわたっている。
- ③ 大学の創立百年に当たり多くのキフが集まった。
- ④ この試合に勝ったなんてキセキとしか言いようがない。
- ⑤ キセイ概念にとらわれず積極的に意見を出した。

d カゲン

- ① 道路交通法の改正で自転車もゲンバツの対象となった。
- ② 近年日本海での漁獲量がゲンショウ傾向にある。
- ③ このままの生活ではそろそろ資金がゲンカイである。
- ④ 新たな校則は自由のゲンリ原則に従って作られる。
- ⑤ 期待していた都会での学生生活に早くもゲンメツした。

e ヒロウ

- ① 今回の大型台風ではヒサイした人がとても多い。
- ② 不眠不休の対応でヒロウがピークに達している。
- ③ 展覧会の会場で書家が互いに作品をヒヒヨウする。
- ④ 都市開発による移転の立ち退き要求をキヨヒする。
- ⑤ 着任後大使は早速書状をヒケンした。

問二

空欄 **A** 五か所に補う言葉として最も適切なものを次の**語群**から一つ選び、解答欄に書きなさい。

語群 〔そして だから そのため そのうえ けれど それで〕

問三

傍線部 **B** 「強いて言えば」とあるが、この言葉の**対義語**に当たる言葉を次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① どうしても言うとするば
- ② あえて言うなら
- ③ 無理に言えば
- ④ どちらかと言えば
- ⑤ 言わずもがな

問四

空欄 **C**、**E** に入る説明の組み合わせとして適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 〔C 短い針〕〔D 短い方の針〕〔E 長い方の針〕
- ② 〔C 短い針〕〔D 長い方の針〕〔E 短い方の針〕
- ③ 〔C 長い針〕〔D 短い方の針〕〔E 長い方の針〕
- ④ 〔C 長い針〕〔D 長い方の針〕〔E 短い方の針〕
- ⑤ 〔C 秒針〕〔D 短い方の針〕〔E 長い方の針〕

問五

本文には、次の一段落が脱落している。これを補うのに適切な場所の記号〔ア～オ〕を答えなさい。

クロウタドリが歌わない朝は、母さんがレコードをかけて、わたしに朝を知らせてくれた。レコードから流れてくるのはたいいてい穏やかなピアノの曲で、母さんはピアノの音が好きだった。

問六

空欄 **F** に補う言葉として最も適当な**擬態語**を解答欄に書きなさい。

問七 傍線部 **G** 「忌々^{いまいま}しげに」とあるが、この説明として**適切でない**ものを次の①～⑤の中

から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 非常に腹立たしいような感じで
- ② 神々しいように
- ③ しゃくにさわるように
- ④ 不吉であるかのように
- ⑤ 縁起が悪いように

問八 傍線部 **H** 「難しかったのは、「きらきら」や「ぴかぴか」、「もくもく」で、すぐには

理解できなかった」とあるが、その説明として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 匂いを正確に言葉で表現するのは難しかったということ
- ② 冬の始まりの頃に吹く冷たい北風のような音をうまく聞き取れないということ
- ③ 時間の流れという感覚があまりよく理解できなかったということ
- ④ 宇宙人の言葉を聞くみたいで途方に暮れたということ
- ⑤ 触覚で確かめることのできない言葉はすぐには理解できなかったということ

問九 傍線部 **I** 「おなかに穴があいたような^{おぼつか}覚束ない気持ち」とあるが、その説明として**適**

切でないものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 内面の葛藤や不安、心配事が表面化した心許ない気持ち
- ② 心の中にある感情や、出来事に関しての無力感や虚脱感を感じる気持ち
- ③ おなかに穴が開くことで内部が空洞化し、満たされない感情などを表す気持ち
- ④ 古い考えや感情が解放され、新たな気付きや可能性が生まれる前向きな気持ち
- ⑤ 何かを失ったり、自己の一部が欠落していると感じたりする気持ち

問十 傍線部 **J** 「鈍色とわたしは、もしかすると前世で親友だったのかもしれない」とある

が、「目が見えない」「鈍色」という言葉を使い、百五十字以上、二百字以内で「前世で親友だったかもしれない」ことについての説明を書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

二 次の文章は、井田徹治の著書『ウナギ 地球環境を語る魚』の一部である。これを読んで後の問に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

川を上るシラスウナギにとっての大きな問題は、これまでは塩水の中で暮らしていたのに、これからは淡水の中で暮らさなければならないということである。ナメクジに塩をかけると溶けてしまうように、生物はその細胞の中の塩分濃度よりも高い塩分に包まれると、細胞内部の水分が外部に流れ出して死んでしまう。逆に体内の塩分濃度より、塩分の濃度が低い淡水に包まれると、水が細胞内に流れ込んで膨らんで ^aハレツし、やはり死んでしまう。体内と体外の塩分濃度の差によって生じる水圧のことを「浸透圧」という。

水の中で生活しない人間にはこれはほとんど関係ないことなのだが、一生のすべてを海水、あるいは淡水の中で過ごす魚にとっては、生死を握る重大な問題になる。魚はさまざまな工夫を長い進化の中で身に付け、体内の浸透圧を調節して環境に順応してきた。一生の間に遠い海と川とを行き来するウナギとなると、これは非常に複雑で巧みな仕組みになっている。

ウナギと言えばヌルヌルした皮膚を思い起こす。ウナギの体の表面を覆っているこのネバネバ物質が、ウナギが海水中でも淡水中でも、時には水から出た状態でも生きていける秘密の一つである。この物質は、タンパク質と糖が結び付いた高分子物質で「ムチン」と総称される。オクラや納豆に含まれるネバネバも同じムチンだ。ムチンは山芋にも含まれるので、昔の人が ^Aウナギが山芋になると考えたのも、うなずけなくはない。ウナギの場合、ムチンはウナギの体表面全体を覆い、普通の魚が持っているうろこは、皮膚の下に隠れている。

^Bウナギの体表面を覆うムチンの役割は、体を守り、外敵から逃れるためだが、ムチンはウナギの細胞内に、水分が入り込んだり、流出したりするのを防ぐ役目も持っている。ウナギの体の表面を覆うネバネバをこすり取って淡水の中に入れると、周囲の水分が体の中にどんどん入り込み、ウナギは水膨れになって死んでしまうという。

もちろん、ウナギが幅広い塩分濃度の水に対応できるのはネバネバだけに依るものではない。ウナギは長い進化の過程で、非常に興味深い仕組みで、体内の浸透圧を調節していることが、最近の日本での研究で分かってきた。

一般に、海の魚の体内の塩分濃度は、大量の塩分を含む海水に比べて非常に低い。このためうかうかしていると体内の水がどんどん外に出て行ってしまう。これを防ぐために海の魚は大量の水を飲んでいいる。そして水と一緒に取り込んでしまう塩分をえらや腎臓などから ^Cしている。淡水魚の場合はこの逆だ。淡水魚はえらなどから水と一緒に塩分を取り込み、水は腎臓から ^Cし、塩分だけが体内に残るようにしている。つまり、海水魚のおしっこは非常に塩分濃度が高く、逆に淡水魚は塩分の薄いおしっこを大量に ^Cするということになる。こうして塩分や水分を自然の流れに逆らって汲み出したり、取り入れたりすることに多くのエネルギーを使っている。ウナギも海にいるときは他の海水魚と同じように大

量の水を飲んで、その中の塩分を体内に取り込んでいるらしいことは早くから指摘されてきた。

ウナギが他の魚にはないユニークな手法で淡水に適応していることを突き止めたのは、東京工業大学の広瀬茂久教授らのグループだ。

広瀬さんが注目したのは海水中などに比較的多く含まれる硫酸イオンという物質だった。ウナギの腎臓で硫酸イオンの吸収に関わる物質の働きを海水と淡水で比較し、硫酸イオンの動きを調べたところ、ウナギは海水中では硫酸イオンを捨てるが、淡水中ではいったん、自分のおしっこの中に入った硫酸イオンを腎臓の尿細管から体に引き戻していることが分かった。普通の淡水魚は多くのエネルギーを使って、淡水中にわずかに含まれる塩素イオンを体内に取り込んで体内の塩分濃度を維持しているのに対し、ウナギは塩素イオンの代わりに硫酸イオンを使っているらしい。研究グループが淡水ウナギと海水ウナギの血液中の硫酸イオンを調べたところ、淡水ウナギの血液中の硫酸イオンの濃度は、海水ウナギや他の海水魚と比べて二〇倍も高いことも分かった。広瀬さんによると、淡水ウナギほど大量の硫酸イオンを血液中に持つ生物は見つかっていないという。D 淡水ウナギは、他の淡水魚がごくわずかな塩素イオンを多くのエネルギーを使って取り込んでいるのを尻目に、自分の体内でも生成できる硫酸イオンを利用して体内の塩分濃度を維持することで、生存競争において圧倒的優位に立っているという。

「淡水で生活する際、このようなシステムを持つことが個体の生存にとって大変有利であることはE 想像に難くない。現在、ウナギの祖先はもともと海水魚であったとする説が有力である。海で産まれたウナギが、より外敵が少なく安心して成長できる川や湖に棲めるようになったのは、長い進化の過程でこの『硫酸イオン貯留システム』を発達させたからに違いない」というのが広瀬さんらのグループの結論だ。

といっても、塩分濃度の濃い海水と、塩分がほとんどない淡水との間で生活の場所を変えるのは、人間にしてみれば真夏の北半球から、急に真冬の南半球に行くようなものなので、いくらb コウミョウな仕組みを獲得しているウナギといえども、そう短時間の間には適応できならしい。

ウナギを淡水から海水に移すと二日目には体重が一〇%―一五%減少し、その後徐々に回復して一週間ほどで元の体重に戻るといふ。ウナギは海水に入れられるとしばらくの間、大量の水を飲み始め、腸から大量の水を体内に取り込むようになる。五日間でこの量は二倍以上になるといふ。ところが一週間を過ぎるころから徐々に環境に順応し、水を飲む量も、腸から吸収する水の量も、体重の変化も落ち着いてくるという。

高知県の四万十川で一生を川漁師として過ごした山崎武氏たけるの著書には、川を上る前のシラスウナギや海に下ろうとする親ウナギが、塩水と淡水が混じり合う汽水域でしばらくの間

とどまって「順応訓練」をする、との観察結果が紹介されている。アマチュア生物学者でもあった山崎さんの著書にはこんな一節がある。

私の実験による調査結果であるが、昭和三十八年八月に稀有の大洪水があり、大量の降りウナギが捕獲されたので、そのうちの百匹に^cヒョウシキをつけて海岸線にもっとも近い河口付近に放流してみた。その後そのうちの七尾が再捕獲されたが、これは九月に二個体、十月に二個体、十一月になって川が濁るほどの雨の後で三個体が獲れた。場所それぞれ放流地点から二キロ、四キロ、七キロメートル上流地点であつた。(中略)この十一月の増水以後、降りウナギはこの川から姿を消した。この事実から推測して、数ヵ月間、海水への順応訓練を続けていた親ウナギは、水温の低下や日照時間等の影響も受けて、一挙に遠い海の彼方の産卵場に向かったものと考えられる。この試験結果により、親ウナギとシラスウナギそれぞれの浸透圧に対する順応訓練を続ける場所は、同一の汽水域であり、定期的に春と秋の違いはあるが、その期間は大体同じくらいであり、親ウナギとシラスウナギは入れ違いに、一方は川から海へ、一方は海から川へと移動するものであるとの確信を深めた。

(『四万十 川漁師ものがたり』同時代社、一九九三年)

日本のウナギ資源が大きく減った原因の一つは、多くの生物にとって重要な湿地や干潟など汽水域の環境が開発によって破壊されたことだと言われている。人間は、長い旅をするウナギが骨休みのために、そして長旅の準備をするために^F非常に大切な休憩場所を奪ってきってしまったのであろう。

群れをなして泳いでいたウナギが^dヘンタイをしてシラスウナギになり、水の底を這い回るようにして泳ぐようになるのにしたがって、ウナギに「縄張り意識」が生まれることが観察されている。シラスウナギに姿を変えたウナギは、自分の生活に適した条件が揃い、縄張りを作る場所を目指してひたすら川を遡ってゆく。遡上を始めたころのシラスの体色はもはや透明ではなく、ウナギ本来の黒っぽい色をしている。自分がこれから暮らす環境の中で、天敵に見つかりにくいようにするためだ。体色が黒っぽくなった小さなウナギは「クロコ」と呼ばれている。河川を上り始めるのはだいたい年の初め一月から三月にかけてのことだ。

ただ、一言で川を遡ると言っても、ようやく自分で泳げるようになったものの、体長五センチ程度のシラスウナギにとって、河川を上るといえるのは容易な仕事ではない。シラスウナギは秒速四〇センチ以上の流れがあると流れに逆らって泳ぐのが難しくなることが分かっている。

ウナギが泳ぐ速度は秒速五〇センチから、大きなウナギでも一五〇センチとされている。

実際には川の流れに逆らって泳ぐので、川を遡上する速度は秒速五センチから、せいぜい秒速一五センチとされる。泳ぐ力は弱々しいが、ウナギの幼魚は河川をどこまでも着実に上ってゆくことが知られている。場合によっては水から上がって地上を這い回ることもあることは既に紹介した。欧州での調査では川を遡上するウナギの平均体長は七センチ―八センチだったが、中には体長三〇センチを超えるものや四〇センチ近くと大型で、体色もすっかり黒くなったウナギも含まれていた。ゆつくりと、しかし着実に二年以上かけて川を上り続けるウナギがいるらしいことも報告されている。

サケのように川の上流で卵を産むために川を上る魚は、そもそもウナギと違って大きく成長した魚で、遊泳力も強い。彼らは河川の中心部の速い流れを頼りに川を上るので、流れを見失うことは少なく、最短距離で目指す川の上流までたどり着くことができる。だが、ウナギは川の中心から少し離れた流れの弱い部分を上ることが多いので、流れを見失って袋小路に入り込んでしまうことが他の魚に比べて多いという。もちろん流れを探して引き返すことも多いのだが、道に迷って地面の上を這い回っている姿が ^eモクゲギされるのは、袋小路に入り込んでしまったウナギの ^G窮余の策なのかもしれない。

問一 二重傍線部 a↘e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部 A「ウナギが山芋になる」とあるが、「山芋がウナギになる」という表現もある。「**山芋がウナギになる**」ことを説明したものとして**適切でない**ものを次の①↘⑤

の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 数字や地位、人気などが急激に上昇すること
- ② 物事が突然、意外なものに変化すること
- ③ 取るに足らないものが急に出世すること
- ④ あるはずのないことが現実にかかることがあること
- ⑤ 転変の激しい世の中で、何が起るかは分かったものではないこと

問三

傍線部 **B** 「ウナギの体表面を覆うムチンの役割」とあるが、その役割を二つ三十字以内で本文中から書き抜きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

- ①
- ②

問四

空欄 **C** に補う言葉として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 吸入
- ② 循環
- ③ 生産
- ④ 取得
- ⑤ 排出

問五

傍線部 **D** 「淡水魚がごくわずかな塩素イオンを多くのエネルギーを使って取り込んでいることを尻目に」とあるが、「**尻目に**」の内容を説明している部分を本文中から探し、最初の五文字を書き抜きなさい。

問六

傍線部 **E** 「想像に難くない」とあるが、この**対義語**で最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 想像に余りある
- ② 想像を絶する
- ③ 想像が付く
- ④ 想像し難い
- ⑤ 想像に及ばない

問七

傍線部 F 「非常に大切な休憩場所を奪ってきてしまった」とあるが、その説明を十五字以内で文中から書き抜きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

「

」

問八

傍線部 G 「窮余の策」とあるが、この意味を説明したものとして不適切なものを次の

①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 苦渋の選択
- ② 窮鼠猫を囓む
- ③ 苦肉の策
- ④ 最後の手段
- ⑤ 非常手段

問九

筆者は、ウナギの不思議な生態について『四万十 川漁師ものがたり』という資料も扱いながら述べている。ウナギの生態についてあなたが初めて知ったこととそれに関する考えを資料の内容も踏まえ、「環境」という言葉を使って百五十字以上、二百字以内で書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。